

「紀要の魅力と大学の役割」

2020年10月31日および11月1日の2日間、「研究・イノベーション学会第35回年次学術大会」がオンライン開催されました。同大会において大会実行委員会が紀要編集者ネットワークと共催したのが本稿タイトルでもある「紀要の魅力と大学の役割」（以下「本セッション」）というセッションです。大会参加者および学会員以外の方も参加できるよう公開セッションとして開催したこともあり、多数の方に参加いただきました。

私は「紀要¹はいま存在意義を問われており、関係者は機関や立場の垣根を超えて今後の展開について集中的に議論される必要がある」と考えております。紀要がこれまで果たしてきた役割について、研究者、特に人文社会科学の研究者は、今でも高く評価されています。紀要は研究論文、研究ノート、事例報告、翻訳、書評など様々な学術的な成果、知見を取り扱う「懐の深さ」があります。そのため研究者数が少ないなど学会のジャーナルでは発表が難しい分野に取り組む研究者にとって貴重な発表の機会を提供してくれます。大学院生など若手にとって紀要への投稿は、極めて実践的な教育活動でもあります。

しかし、紀要に投稿される論文は減少傾向にあります。財政状況が厳しいこともあり、紀要の発刊回数を減らす、または休刊を決断した大学もあります。投稿原稿減少の理由は、大学、そこに所属している教員の置かれている厳しい現状にあります。現在、教員の研究業績を評価する判断材料として重視されているのが、査読付国際ジャーナルへの掲載および引用実績です。そのため、若手を中心に教員は投稿先として査読付国際ジャーナルへ掲載を重視するようになりました。国内学会も分野や規模を問わず査読付ジャーナルを発刊するようになり、国内における投稿先の選択肢が増えたことも紀要への投稿が減少している理由の1つです。一般的に紀要論文は外部における発表とはみなされず、教員の業績評価時、学会の査読付ジャーナルより低く評価されてしまいます。そのため、教員は高く評価される外部の査読付ジャーナルへの投稿を重視するのです。

大学のミッションに「教育」、「研究」に加え「社会貢献」が加わりました²。これにより

¹ 本稿では紀要を「大学、または学部など大学部局が定期発行する学術誌」と定義する。

²平成18年に「教育基本法」が改正、大学の役割として「社会貢献」が明文化された。

改正前

「第五十二条 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。」

改正後

「第七条 大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。」

広報活動の重要性が高まり、学術情報の発信も WEB サイト、動画、パンフレット、公開講座などのアウトリーチ活動、展示会など様々な方法で行うようになりました。しかし、それらの活動を担当する人員が増えたわけではありません。コンテンツの専門性の高さから若手教員がその役割を持ち回りで担当するケースが多いのではないのでしょうか。大学でのポジション獲得競争は、厳しくなる一方です。研究に専念する時間の確保が何より大切な若手が紀要の編集や発刊にかかる作業を、研究活動を制約する「雑務」と捉えるのは仕方がないことでしょう。若手教員が紀要不要論を唱える気持ちも（寂しいですが）理解できます。

紀要をめぐる問題は、研究推進、成果管理、経営資源の選択と集中、学内スタッフの待遇や職務内容の明確化、効果的な情報発信など「大学経営」そのものの課題でもあります。本セッションは「紀要の危機と大学の現状」というテーマで開催されたともいえます。

このように紀要の現状は大変厳しいですが、同時に再評価も行われるようになってきました。査読付国際ジャーナルへの掲載を重視することについては、(1)投稿される研究が「注目される」テーマ、「数多く取り組まれている」テーマに集中してしまい、また(2)用いられる研究手法も限定されるため掲載論文がパターン化され、独創的、革新的な研究が掲載されない（斬新なものはリジェクトされてしまう）などの問題点が指摘されています³。そこで扱うテーマ、ページ数、レイアウトなどの自由度が高い紀要が注目されています。以前は発行部数や流通上の制約から紀要の読者層が限られていましたが、インターネット上での無料公開が当たり前になったことにより紀要論文は誰にとっても身近なものとなり、読者が増えています⁴。

学問を深化・発展させることをミッションとする大学にとって「多様性」は非常に重要なキーワードです。国際競争力の高い研究の促進と研究の多様性の確保の両立が大学には求められています。トップジャーナルへの投稿に加え、自由な発想に基づく独創的な研究を支えている紀要への投稿も評価するような大学であり続けることも大学のすすむべき方向の1つではないのでしょうか。また紀要は「個人事業主とも言われる独自の個性をもつ教員の総体として大学あるいは学部のひとつの見識を示す⁵」役割も持っています。わたしたちは、紀要を研究成果としてだけでなく、貴重な「経営資源」としても考えるべきなのかもしれません。

本セッションでは、コストなど限られた論点しか扱うことができませんでした。今後の紀要のあり方を考えるためには、学術分野でも普及してきたブログ、SNS、動画などによる個

³ 太田康広「会計研究の危機と日本の会計学界」現代ディスクロージャー研究 (10)、1-15 頁、2010 年 3 月。

⁴ 多くの紀要は機関リポジトリにて公開・管理されており、ダウンロード数などによりある程度、正確に読者数を把握できるようになった。

⁵ 重松伸司「誰に向かって書くのかー二つの紀要からー」追手門学院大学国際教養学部紀要(10)、3 頁、2007 年 1 月。

人による情報発信との関係など新しい論点も検討していく必要があります。紀要の愛読者、編集者、投稿者だけではなく、事務職員、研究プロジェクトの企画・運営を担当するリサーチ・アドミニストレーター (URA)、IR 実務担当者⁶などの学内関係者に加え、省庁関係者、経営学者など様々な立場の方と一緒に「紀要の魅力と大学の役割」について継続してディスカッションできることを期待しております。

研究・イノベーション学会 第 35 回年次学術大会実行委員
原 田 隆 (東京工業大学 情報理工学院 主任 URA)

読者の皆様へ

本稿の内容および意見は著者個人の見解です。誤謬も著者個人の責任に属します。

開催したセッション、および本稿で取り上げた論点につきましては引き続き検討したいと考えております。感想をぜひお聞かせください。

公開日:2020 年 11 月 26 日

⁶ 大学 IR (Institutional Research) とは「学内外の教育研究等にかかる情報の収集・分析・評価を行い、大学運営にかかる計画策定や意思決定などを支援、教育研究活動における改善のための情報を提供する」業務のことである。(東京工業大学情報活用 IR 室 WEB サイト : <https://www.irds.titech.ac.jp> (accessed 2020-11-08))